

■ Colloquium I *Memories and Visions: From Tradition to a New Identity*

Session 1: *The Dialogue Between East and West*

Hasegawa Yuko (Japan)

*From Frame to Frameless*

あらゆる表現は基本的に構造的、概念的なフレームをもつ。作家の視点発想そのものが一つのフレームであり、創造行為の始点といってもよい。本発表は、フレームに対してフレームレスという、あえて曖昧で定義の困難な概念を設定する。これは我国の作家たちが西洋的な造形原理と東洋的な自らの文化的アイデンティティをどのように共存、あるいは融合させてきたかを語るキーワードとして提案されるものである。

我国では、存在としての造形物そのものの他に、身体的な行為、作法、儀礼などの反復に造形に代替するものを見る伝統がある。20年に一度新たな社殿を建設し、そこに遷宮する伊勢神宮の式年造替がその例としてあげられる。建築という造形物としては、一から作りなおされるにもかかわらず、それは行為を通じて同一の造形と見なされる。この不連続の連続性によって、軽やかな木造建築は初めて永遠に存続することが可能となる。造形的なフレームのもつ限界が反復によって時間のフレームを超える一フレームレスとなるのだ。

行為の反復の例は、例えば現代作家においては河原温にみることができる。河原はしかし、これをカンヴァス絵画という最も西洋美術の正統派のメディアを用いて行なった、1日一枚日付絵画を描くという行に似た行為とその痕跡としての絵画は、歴史観の希薄な日本人より、歴史観や歴史における個人の存在の痕跡を重視する欧米のコンテクストにとって重要な意味をもったといえるだろう。そこでは時間は方向づけられ、確実に死にむかって進んでおり、河原という個人の生の存続の間に限定されている、河原の生というフレームの中に入っているのだ。が、河原は"100万年の本"を反復の行為性の延長に置くことで、フレームレスへの連想をのこす。その意味で河原の作品にはきわめて巧みに東西の思想、方法論が融合されているといえる。

一方、時間は絶えず変化しながら円環を描いているという東洋的な時間概念は、宮島達男の作品におけるガジェット、デジタルカウンターのランダムで無限に続いてゆく連鎖反応によって、より空間的に示される。そこでの行為主体は'、生物的な動きを示すガジェットである。そこには最終的な終一死はないが、無数の死と誕生が永遠に繰り返される。河原のような個の限定一フレームはない。個我は非生物であるガジェットの中に拡散、消滅している。

東洋的な、個我を無化してしまう軽さは、個の視点からの世界の構造把握一フレーム形成を容易く乗り越えてしまう。それは換言すれば個々の存在論より、関係論の優先である。その誘惑の中にあつて、確かな存在感と構造一フレームを維持しながら、同時に外部とのメタボリックな関係を持ち続ける開かれた変容体一フレームレスであること、は決して容易ではない。

本発表では、上記の作家の他、同様の試みをさまざまな作家のアプローチを通じて検証する。関係性とともに行為性、不断の変化、プロセス、"現在"性、となどがその共通要素として抽出されてくる。例として、都市空間における生成と破壊というサイクルの中で、既存の建築(フレーム)の内部を外部へ連続させながら脱構築していく川俣正、伝統的な庭や建築を参照しつつ、簡潔な基本構造(フレーム)に、多様な隙間と外部空間の内部への取込みを組み合わせることで、不連続で、密接な外部との関係をもたらす安藤忠雄の建築、絵巻物の開放的連続性をもったフレームを継承する現代マンガ、コンセプトの可能性というフレームを大胆にはずしていく曾根裕のコンセプトワーク、平面におけるフレームレス一世界を覆うドットによる草間弥生のエンヴァイロンメンタルアートなど、が挙げられる。